

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

これからの幼児教育

これからの幼児教育

2013

秋

2013年9月10日発行

発行人 岡田晴奈

編集人 谷山和成

発行所(株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ教育総合研究所

©Benesse Corporation 2013

表紙／裏表紙

千葉県 ● 和光保育園

『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、子どもたちの成長に寄り添う研究と社会への発信を通して、一人ひとりが学びに向かい、今と未来を“よく生きる”ことに貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

次号(春号)は2014年1月上旬発刊(予定)です。

第1
特集

園の保育観を入園前の保護者にも わかりやすく伝えるには？

インタビュー ● 東京大学大学院教育学研究科教授 **秋田喜代美**

第2
特集

写真を使って 保育を「もっと伝える」ポイント

データ

30歳以下・35歳・40歳保護者を比較
世代間の子育て意識の違い

園内で
回覧してください

2 第1特集

園の保育観を入園前の保護者にも
わかりやすく伝えるには？

- 2 インタビュー
保護者の期待や不安をくんだうで、
園の理念を伝え、保育への共感を深める
東京大学大学院教育学研究科教授 秋田喜代美
- 5 座談会
価値観が多様化する保護者に
どのように保育観を伝えるか
あけぼの幼稚園 園長 安家周一 / 立花愛の園幼稚園 園長 濱名 浩 /
ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室 顧問 磯部頼子
- 8 事例1 ● あけぼの幼稚園 (大阪府・私立認定こども園)
保護者の不安や誤解にも向き合う中で
保育観や人間観を共有
- 11 事例2 ● 立花愛の園幼稚園 (兵庫県・私立認定こども園)
データや事実を織り交ぜた説明で漠然と
しがちな保育理念をイメージしやすくする

14 第2特集

写真を使って
保育を「もっと伝える」ポイント

- 15 事例1 ● 和光保育園 (千葉県・私立)
壁新聞形式の「ボード・フォリオ」で
子どもに寄り添う保育の姿勢を伝える
- 18 事例2 ● 鳩の森愛の詩保育園 (神奈川県・私立)
園だからこそ見せる姿を写真でとらえ
「個人アルバム」にまとめて育ちを伝える

20 データから見る幼児教育

30歳以下・35歳・40歳保護者を比較
世代間の子育て意識の違い

24 連載

学びに向かう力を育む
第2回 「あきらめずに挑戦する力」を育む

「これからの幼児教育」2013秋号 2013年9月10日発行
©ベネッセ教育総合研究所 ◎無断転載を禁じます ※掲載内容は2013年8月上旬現在のものです。
発行人 岡田 晴奈 編集人 谷山 和成 発行所 (株)ベネッセコーポレーション 〒206-8686 東京都多摩市落合1-34 お問い合わせ先 0120-933-964 (通話料無料)、受付時間 10:00
~17:00 (日曜・祝日は除く) ※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は 086-270-5037 へおかけください (ただし通話料がかかります)。
企画・制作 ベネッセ教育総合研究所 印刷・製本 凸版印刷株式会社 編集協力 (有)ペンダコ、二宮 良太 撮影協力 ヤマガチイッキ、荒川 潤 イラスト協力 アサヌマリカ



ベネッセ教育総合研究所 発足のご挨拶

この度、加速し複雑化する「子育て・教育環境の変化」に迅速かつ総合的に対応し、
一層の社会貢献を果たす目的の下、株式会社ベネッセコーポレーションの研究機関
である「ベネッセ教育研究開発センター」「ベネッセ次世代育成研究所」「ベネッセ
高等教育研究所」「ベネッセ食育研究所」の研究機能を、「ベネッセ教育総合研究所」
に統合する運びとなりました。

今後も、「子どもたちの未来」と子育て、教育のあるべき姿を模索し、社会に貢
献できる民間の教育研究機関を目指して活動してまいります。引き続きご指導いた
だきますよう、何とぞよろしくお申し上げます。 2013年9月吉日

ベネッセ教育総合研究所長 谷山和成

ベネッセ教育総合研究所

<http://berd.benesse.jp/>

次世代育成研究室	妊娠・出産、子育て、保育・幼児教育領域
初等中等教育研究室	小学校・中学校・高等学校領域
高等教育研究室	大学領域
グローバル教育研究室	デジタル、英語領域
情報編集室	情報誌、WEB サイト運営

「これからの幼児教育」ウェブサイトが新しくなり、より充実しました

ここが充実 1

WEB限定
記事

特集に連動した
WEB だけの記事も
ご覧いただけます

ここが充実 2

編集部員
による発信

「これからの幼児教育」の
制作にまつわる思いや
気づきを発信していきます

ここが充実 3

すべての記事を無料で
ダウンロード可能

◎過去1年間の特集テーマ
2013年 夏号 子どもの育ちの「見える化」で保護者にもっと信頼される園になる
2013年 春号 保育者の気づきと学びを促す園内研修
2012年 秋号 保育者の力を引き出す園長のリーダーシップ



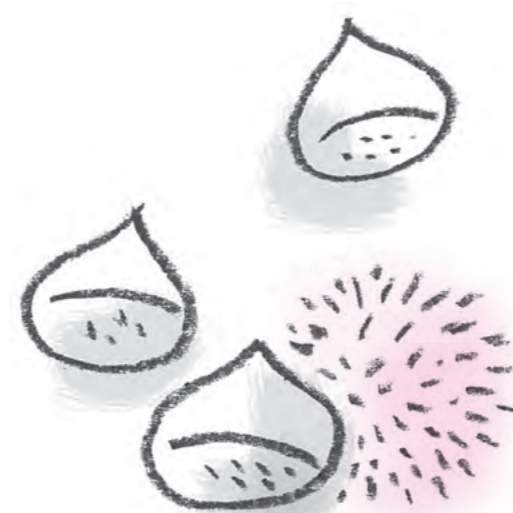
はじめに

秋は、運動会などの行事も多く、集団の中での子どもの成長を一段と感じられる時期であり、入園を検討している未就園児の保護者も多く園を訪れます。未就園児の保護者に園の保育観を伝えることは、入園後、園が保護者とともに子どもの育ちを支えていく望ましい関係の構築につながります。

そこで第1特集では、未就園児の保護者に園の保育観をどのように発信していくか、事例を交えて考えていきます。さらに第2特集では、写真を使って保育観をよりわかりやすく伝える工夫を紹介します。

秋から本格化する入園説明会や園見学で本誌をお役立ていただければ幸いです。

「これからの幼児教育」編集長 橋村美穂子



<http://berd.benesse.jp/magazine/en/latest/> または で



園の保育観を入園前の保護者にも わかりやすく伝えるには？

園の保育を在園児の保護者だけでなく、未就園児の保護者にもわかりやすく伝えるには、園の理念をより明確にして伝える工夫が必要です。自園の保育のよさを伝え、子どもの育ちに対する保護者の理解を促す理念の発信について考えます。

インタビュー

保護者の期待や不安をくんだうえで、 園の理念を伝え、保育への共感を深める

入園前の保護者に園の保育を理解してもらい、入園後に協力を得やすくするためには、どのような発信を心がけるとよいのでしょうか。
東京大学大学院教授の秋田喜代美先生にポイントをうかがいました。

保育観を理解した保護者は 園に協力的になる

入園前の保護者に対して園の理念を伝えることは、子どもの育ちを支えていくパートナーシップづくりの意味でも大切です。園の理念を十分に理解した保護者は、入園後、園に対して協力的になり、連携して子どもを育てる関係を築きやすくなるからです。

入園前の保護者に理念を伝える主な場としては、入園説明会などがあります。入園説明会では、園長先生などが園の理念や方針などを話すと思います。それらは説明会の柱となる重要な内容ですが、園からの一方的な情報発信になっていないかを今一度振り返るとよいでしょう。

入園前の保護者は、期待と不安の両方が入り交じっています。園生活

を通した子どもの育ちに期待する半面、「食事や友だち関係は大丈夫か」「他の子どもに比べて成長が遅れがあるのではないか」「他の園では、こんなこともやっているようだ」といった、一人ひとりの子どもや家庭の事情に応じたさまざまな不安があります。できる限り、そうした不安に寄り添った発信、コミュニケーションを目指したいものです。

では、園の理念をわかりやすく伝えるポイントはどのようなものか、具体的に考えていきましょう。

ポイント 1
園の思いを「伝える」だけでなく、保護者の思いも「聴く」

こうした保護者の気持ちに応えるには、園が「伝える」だけではな

く、保護者から「聴く」姿勢をもつことも大切です。しかし、入園前の全体説明会で挙手して質問してもら



東京大学大学院教育学研究科教授
秋田喜代美

あきた・きよみ
日本保育学会会長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、「保育の心もち」「保育のおもむき」（いずれもひかりのくに）など。

うというやり方では、なかなか話せないという保護者もいます。そこで、グループに分けて説明会を実施するのもよい方法のひとつです。全体説明会よりも保護者が意見を言いやすく、不安も払拭されやすいでしょう。「子育てについて、どんなことでも話してください」という気持ちで迎え入れることは、そのまま園に対する信頼感や安心感につながるでしょう。

また、グループであれば、一緒に園内を回って子どもたちの姿を見てもらいながら、保育について具体的に説明することもできます。例えば、はさみで何かを作っている子どもがいたとしましょう。保育者から説明がなければ、特に気にも留めない場面かもしれません。ここで保育者が「最初からはさみを使えただけではありません。発達段階に応じて遊びのコーナーを設けることで自然に使えるようになっていきます」といった解説をすれば、どのように子どもの育ちを促しているかという説明になります。

このように何げない保育の一場面を切り出して、ねらいを伝える中で、保護者は、保育者という「専門家」に委ねることの意義を感じてくださるでしょう。

ポイント 2
ふだんの保育や行事について「なぜそうするのか？」という理由を伝える

遊びを中心とした日常の保育や行事などの活動のねらいを言語化して伝えることも大切です。「〇〇

入園前の保護者に保育観を伝えるための 4つのポイント

- ポイント 1** 園の保育観を「伝える」だけでなく、保護者の気になることを「聴く」姿勢も大切に
- ポイント 2** 日々の保育や行事のねらいを言語化する
→育ちのストーリーを話し、遊びなどを通して育つ力を説明したり、視覚的に伝えるとわかりやすい
- ポイント 3** 長期的な見通しをもって、子どもの成長プロセスを語る
→社会の動向を踏まえ、これからの子どもに必要な力を伝える
→すり傷やいざこざなどの育ちに必要な経験についてもきちんと伝える
- ポイント 4** 「園長の思い」ではなく、「園の思い」として、より具体的に伝える
→卒園した子どもの様子や声、卒園生の保護者の声などで説得力をもたせる

ポイント 3
子どもの成長について
長期的な見通しをもって語る

ができた」などの目に見えやすい活動はねらいが伝わりやすいのですが、保護者に「遊び」のもつ意味や大切さを理解してもらうためには、十分な説明が必要です。なかには、「遊ばせているだけで本当によいか」といった不安を抱く保護者が少なからずいることも念頭に置いてください。

行事などの活動のねらいも、きちんと説明しましょう。例えば、代々続いている活動がある園では、「うちの伝統です」と言うだけではなく、「どのような力が育つのか」「子どもがどのような表情を見せるのか」など、子どもの具体的な姿とともに伝えましょう。

遊びについて話す際は、今後の社会動向を受けて、子どもたちに必要な力（例えば、OECDが提唱している21世紀の知識基盤社会に向けた「キー・コンピテンシー（主要能力）」（※）などを例に出し、そのうえで「幼児期にどのような力を育てたいか」を伝えると、遊びを大切にしている理由の説明に説得力が増すと思います。それは、園長先生や保育者たちが、幼児教育についてきちんと学び続けているというメッセージにもなるでしょう。

※「キー・コンピテンシー（主要能力）」とは、これからの社会に必要な力で「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力」「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」「自立的に行動する能力」の3つのカテゴリーで構成されたものです。



また、具体例を出し、遊びの中で育つ場面を説明することも心がけましょう。「何かに出合い、心を動かされ、こんな言葉が出て、こうした行動につながった」などと育ちのプロセスを話すことで、一般の人にはなかなか見えづらい、遊びを通して育つ力を伝えられます。「保育者は、そこまで丁寧に子ども一人ひとりを見てくれているのか」という安心感にもつながるでしょう。



さらに、子ども同士のいざこざやすり傷といった、保護者にとっては一見マイナスに感じられる経験がもたらす成長や、集団だからこぞできる学びについても、理由とともにきちんと話しておきましょう。

園した子どもの保護者からのメッセージなど、園としての思いや願い、それによって成長した子どもたちの声も伝えるようにするとよいでしょう。

単にそれを書き連ねるだけでは、どのような力が育つのが伝わりにくいものです。例えば、園長先生が、その日に印象的だった子どもの姿をブログに書くことで、保育の内容をより具体的に伝えられるでしょう。また、ホームページに写真をつけて更新すれば、園の保育の雰囲気もより伝わりやすくなります。

このような話をする際は、子どもが遊んでいる姿を記録したビデオや写真を見せて、「こういう遊びを通して、こんな力が育っていきます」と、視覚的に伝えるのもわかりやすい方法です。

若手保育者が多い園の場合、「若い先生で大丈夫かな」という不安を抱く保護者もいます。園全体でフォローしたり、高め合いながら保育に取り組んでいる姿勢を伝えることで、そうした不安を軽減できるようにしましょう。

誠実に保育に打ち込む姿は、保護者の心を打ち、必ず信頼感に結びつきます。保育は一過性のもではなく日々の積み重ねですので、保育室の環境や飼育栽培の状況など、保育観は園内の随所に表れ、一人ひとりを大切にしているという思いはきちんと伝わるでしょう。「日頃の保育を飾りなく見てもらえれば」と、ぜひ自信をもって保護者に臨んでいただきたいとします。

ポイント 4
「園長の思い」ではなく「園の思い」として伝える

保育観を伝えるうえでは、「園長の思い」を強調しすぎないように注意する必要があります。あくまでも園の代表者として、「園の思い」を伝えるというスタンスをもってください。

保護者の信頼感は日々の保育から育まれる

近年は、入園前に園のホームページも閲覧する方が多くいます。そこでホームページでのメッセージにも気を配るといいですね。

理念を伝えることは大切ですが、

現場のみなさんへ
◎保護者は、保育者たちが学び続け、育ち続けている園の風土を感じ、子どもを通わせたいと思うものです。ですから、常に園全体の成長を心がけるとともに、自信をもって質の高い遊びや保育をつくり出すように心がけてほしいと思います。そうすれば、きっと保護者の心を引きつけることができるはずです。

座談会

価値観が多様化する保護者にどのように保育観を伝えるか

価値観の変化や多様化に伴い、未就園児の保護者の関心やニーズは変わってきています。園の理念や実践を効果的に伝えるためには、そうした変化を見逃さないことが大切です。未就園児の保護者と接するうえで心がけていることについて、おふたりの園長先生にうかがいました。



立花愛の園幼稚園 (兵庫県・私立認定こども園) 園長 **濱名 浩** はまな・ひろし

あけほの幼稚園 (大阪府・私立認定こども園) 園長 **安家周一** あけ・しゅういち

ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室 顧問 **磯部 頼子** いそべ・よりこ

保育を「サービス」ととらえる風潮も

磯部 本日は未就園児の保護者に園の保育観を伝えるにあたり、園ではどのような工夫をされているか、保護者の意識も踏まえてお話をうかがえればと思います。最初に、未就園児の保護者に接する中で、近年感じる変化などがあればお話し

ください。
濱名 入園説明会では、以前に比べ、「保護者支援」について質問されるかが増えたと感じます。例えば、「預かり保育はあるか」「給食は週何回あるか」など、「より便利に」預けたいという保護者の意識が反映された質問があります。
安家 保育という営みを「サービス」ととらえる風潮が一部に広がっ

ているのかもしれませんが。サービスという考えが強くなると、消費者の立場から「権利」が主張されることがあります。しかし、幼児教育や子育ては、園と保護者が手を携えて進めていくものであり、サービスという考え方とは相容れない面が強くなります。未就園児の保護者には、「家庭と園とは、一緒に子どもを育てていくパートナーの関係です」という



メッセージを伝えています。

磯部 確かに、事前に納得してもらうことで、入園後の保護者との連携はより強固になりますよね。

濱名 未就園児の保護者から、「この園では、行事参加などで保護者は年何回、園に来る必要があるのか」と質問されることがよくあります。ときには、「あまり拘束されたくない」「ボランティアはしたくない」などと、直接言われることもあります。そのようなかたには、少しきつい言い方なのかもしれませんが、「保護者は『お客様』ではなく、一緒に子どもを育てる私たちのパートナーなのですよ」とはっきりとお伝えし、理解していただくようにはしています。一方で、「もっと子どもに関わりたい」という保護者も多くいらっしゃいますので、考え方が多様化していると言えるでしょう。

孤立化する保護者を受け止め関係を築いていく

磯部 保護者の変化の背景にある

子育て環境は、どのように変わってきていると感じますか。

濱名 孤独に子育てをされている保護者が多いという印象を受けます。一時期に比べ、地域のサークル活動の勢いも弱まっているようです。そこで未就園児の子育て広場など、まずは保護者同士がつながれる場を提供することに努めています。

安家 私の園でも未就園児クラスに力を入れていますが、大切なのは、その集まりが盛り上がるよう、活動を促進させていく役割（ファシリテーター）を保育者が担うことです。親子をその場に集めるだけで、専門家が関わらないのでは、公園に集まるのと変わりませんから。

活動を促進させていく際は、保護者は子育てに関する「回答」を求めて未就園児クラスに来ているのではないということに注意しています。今はインターネットや雑誌などに情報があふれ、検索すれば、すぐに回答を得られます。しかし、回答を知ったとしても、子育てへの不安やつらさは収まらないのです。最初に「子育てはひとりで簡単にできる仕事ではない」ということを伝え、「あなたはすごい仕事をしている」と、認めて受け止める姿勢が重要だと思います。自分が認められて自信がわくと、心のスペースが開いて園からの情報も素直に受け止められるようになると思います。

磯部 場を提供するだけの子育て支援では、なかなか人が集まらないという話も聞きます。保護者は、保育者をはじめとした専門家によるサポートを求めているということなのでしょう。

濱名 「無理しなくていいんですよ」というメッセージも大切にしています。山登りにたとえるのなら、園は保護者に対し、「あの山と一緒に登りましょう。頂上から、こんな景色が見えますよ。私たちも一緒に登りますから、安心してくださいね」と、常に伝えることが大事だと思います。それが、子育てのパートナーであるということではないでしょうか。

保護者の協力が子どもにとってプラスになることを伝える

安家 保護者の変化としては、保護者同士の付き合いに苦手意識をもつかたが増えていることもあるでしょう。未就園児の保護者から、「親同士の付き合いは大変ですか」という質問をよくいただきます。それに対し、保護者同士の付き合いが濃密であることは否定しません。そのうえで、行事やイベントなどで協同して理解し合うことによって保護者自身も楽しみながら成長し、子ども



を育てるよりよい環境がととのっていくというプラス面を理解していただきます。どのような行事に協力していただくかも、就園前に十分にお伝えします。

濱名 特に、新興住宅地などに移ってきた新しい保護者は、地域での人間関係が希薄なこともあって、保護者同士の付き合いに難しさを感じることがあるようです。そうした状況も踏まえて説明するように気をつけています。

ケガやけんかの背景にある成長の意味を説明する

磯部 子どものケガに神経質になっている保護者もいます。そのあたりは、どのように説明しているのでしょうか。

安家 私の園では、理念などをまとめた冊子で、園がケガについてどう考えているのかも詳しく説明しています。能動的に遊んでいるときにしたケガは、子どもにとって勲章のようなものでもあります。ただ、ケガはデリケートな問題ですから、事前によくお話して理解していただくことが大切でしょう。

濱名 ケガを避けたいあまりに、危

険がない環境だけを与えていたら、逆に成長が阻害されるということをお話します。

ケガの他に保護者がマイナスにとらえやすいことに、けんかもありますよね。自分の子どもにはけんかをしてほしくないという気持ちも理解できますが、けんかは成長過程に欠かせません。一見、マイナスに思えることに大きな意味があることは、十分に説明しておくことが大事でしょう。

磯部 小さなケガもしないようにしていると、逆に大きなケガをしてしまうこともあるようです。ケガもけんかも現代では園だから経験できることでもあるので、成長における意味を保護者に伝えていきたいですね。

地域への貢献意識が地域の目を園に向ける

磯部 他に、未就園児の保護者に保育観などを伝えるうえで大切にされていることをお聞かせください。

濱名 「園を信頼して預けてほしい」といった話をします。保護者が保育者を信頼してくれなければ、子どもも保育者を信頼しないからで

す。もちろん、信頼していただくためには、言葉だけでは不十分です。「こういう道^{など}を辿って、このような姿を目指しましょう」と、園が子育ての目標を具体的に指し示していくことから、信頼関係は育まれると思います。

安家 園は保育を実践するだけではなく、その内容を伝える努力を忘れてはならないと思います。そのために、私の園では冊子を作ったり、ホームページやブログなどの媒体を活用したりしています。さらに、園児募集という観点よりは、地域貢



献という視点から園を開放することで、結果的に地域の目が園に向いてくるのではないのでしょうか。

磯部 未就園児の保護者の思いや不安を受け止めたうえで、園としての考えを発信していくことの大切さがよくわかりました。本日は貴重なご意見を、どうもありがとうございます。



事例 1

保護者の不安や誤解にも向き合う中で 保育観や人間観を共有

あけぼの幼稚園 (大阪府・私立認定こども園)

半世紀以上にわたり、自由な「遊び」にこだわった保育を実践してきたあけぼの幼稚園。保護者と心をひとつにして、「10年後、20年後に実を結ぶ」保育を目指しています。そのために、保育観をまとめた冊子を活用するなどして、未就園の時期から保護者と目線を合わせることに力を入れています。

保育の「根っこ」となる 考え方を冊子として整理

1954年の設立以来、あけぼの幼稚園は、「自由な人間になる」という教育理念を掲げ、幼児期の「遊び」の大切さにこだわった保育を実践してきました。一見、遠回りに見えても、10年後、20年後に実を結ぶことを願う「人生の畑づくり」が、子どもの伸びやかな成長につながるという考えをもっています。

そのような保育は、最も身近な環境である家庭と園とが心をひとつにすることで、初めて成立するというのが園の考えです。そこで、就園前の時期から保護者に保育の理念を伝え、共有することを大切にしています。

入園希望者に販売される書類セット(500円)の中で、ひときわ目を引くのが、『あけぼの』という生き方—ようこそ「あけぼの子育て村」へ』(A5サイズ・36ページ:図1)と題されたフルカラーの冊子です。2012年、園の理念を保護者、保育者とともに再確認することを目的として発行されました。園長の安家周一先生は、次のように話します。

「現在、6施設を運営し、園児数は600人を超えます。保育者をはじめとしたスタッフは約170人に上るため、園としての考えを冊子にまとめて共有を図りたいと考えました。いわば、保育を考えるうえでの『根っこ』となる部分です。この冊子を題材として学年ごとの保育者で読み合わせをするなど、研修にも活用しています」

子どもと大人がともに「よく生きる」大切さを伝える

冊子は、保護者に対して園の保育観を伝えることを意識した読み物風のわかりやすい内容となっています。

園の基本的な考え方を表した項目のひとつが、『『よく生きる』という権利』と題されたものです。ここでは、最初に「人は『よく生きる』権利を有している」と述べたうえで、「保護者が『よく生きよう』としていると、その親を見て育つ子どもは、当然『よく生きよう』とします」と説明し、子どもとともに大人が育つことの重要性について語っています。

「そもそも、保護者の誰もが、初めは親としては『初心者』です。そ

園長 安家周一先生



のことを意識し、肩の力を抜いて、『ともに育つ』という気持ちが大切だと伝え続けています」(安家先生)

「ケガ」について 子どもの面から見た効用を伝える

保護者の心配の種である「ケガ」についても、「子どもには『ケガをする権利』がある」という項目で丁寧に説明しています。ケガは決してマイナス面があるばかりではなく、「子どもたちは能動的な遊びの中で、さまざまなケガに遭遇し、その経験から慎重さを身につけます。そのような意味から、小さなケガは、大きなケガの最大の予防となる」というのが園の考えです。

ある子どもが、保育中、額にケガをしたことがありました。連絡を受けて駆けつけた保護者に安家先生が謝罪をすると、「子どもには『ケガをする権利』がありますから、当然

のことです」と返されました。安家先生はそれを聞いて、園の考えが保護者に深く理解されていることを実感したと言います。

他に冊子は、「『子ども中心』である」(大人の都合や価値観はそれぞれだが、子どもを中心に育てること、育つことに価値をおくという考え方)、また「自然を生きる=不便、不足、不快、不潔からの学び」(便利で、満ち足り、快適で清潔な無菌の環境では、力強い子どもの育ちは達成できないという考え方)などの項目で構成されています。

「設立から約60年が経過した2012年の時点の考えや思いをまとめています。これで終わりということではなく、さらなる保育の充実を求



め続け、随時、改訂していきます」(安家先生)

不安や誤解を招きやすい「ウワサ」にQ&Aで答える

他に、未就園児の保護者が手にする書類セットの中でユニークなのが、

「あけぼの」に関するウワサ一覧」(図2)というプリントです。

「未就園児の保護者の間には、園に関するさまざまなクチコミが回っています。なかには、不安や誤解につながるものもあるため、保育者の耳に入ったウワサについてまとめて答えています」(安家先生)

例えば、よくあるのが、「親の付き合いが大変そう」というウワサです。

「確かに、保護者同士の関わりが強いのは特色のひとつです。そこでプリントの中では『クラス、地域、係などさまざまな場面で保護者同士の関わりがあるのは、同じ年代の子どもをもつ保護者同士が心を開いて、私たち保育者と一緒にあけぼのの保育をつくり上げていただきたいと考えているからです。最初からうまくいなくても、だんだん上手になりますから心配する必要はありません。あけぼのでできた保護者間の友だち関係は、卒園後も続いているようです』とお伝えしています」(安家先生)

書類セットには、DVDも含まれます。これは、保育者が、園の生活や行事を撮影した映像や画像をパ

図1 あけぼの幼稚園の教育理念をまとめた冊子



あけぼの幼稚園の理念を1冊にまとめた冊子『あけぼの』という生き方。保護者への発信であると同時に、保育に関わるスタッフにとってのよりどころでもあります。



図2 保護者の素朴な疑問に答えるQ&A (一部抜粋)

“あけぼの”に関するウワサー一覧
～真相してもらいやすいですか？～

1)「クラスでまとまって一緒に遊ぶことがないって本当？」
私達は、一日を通して子どもたちが自分の興味のあるものでじっくりと遊ぶように、自ら遊びを選択し、楽しむ、考えることのできる環境を設定しています。その中で、クラスのみならず遊び(集団遊びや一斉活動)も、一人で黙々と集中する遊びも、どちらも大切と考え、保育を組立立てます。家庭や地域では経験することができず、集団の場である幼稚園だからこそ経験できる「集団遊び」での育ちは、私達の考える保育の中でも大切なものです。仲間と遊ぶことはとても楽しい時間です。

2)「自由な時間ってあったらいいの？」
それぞれの子どもの興味関心に基づいて物事に取り組むことはとても大切なことだと思えます。また、何をしようかわからないために、周りの子どもに視線を向けたり、ポーズしたりする時間も貴重なことです。このような時間が保障されることがあけぼのの特徴でもあります。そのためにも、担任だけでなく全園児の特性や日々の様子を全職員ができるだけ知っていて、それぞれの場面で適切に声をかけたり、接ししたりする必要があります。ゆるやかな見守りの姿勢です。

3)「地まわりやルールを守ることを教えていますか？」
人間は社会を構成して生きる動物と言われます。その人間が園生活の中で決まりやルールを守ることはお互いに快適に生活するためにとても大切なことです。子ども達の成長段階にお互いに楽しく遊ぶには、ルールが守られなければなりません。強りばかりではみんなが楽しいとは思えないように、様々な気づきややり取りの中で存在するという人と関わる力が少しずつ培われます。子ども達自身が対等な子どもとの関わりの中で気づけるように配慮しています。

4)「うちの子はおとなしいから活発な子にいいから心配……」
活発な子もいればおとなしい子もいる。思春期を迎えるまでの子ども時代は、個性を全面に出せる、人生で唯一絶好のチャンスです。私達はその子らしさを最大限に尊重したいと考えていますので、それぞれに合わせた関わりを心がけます。初めての場面の中で、トラブルも起こり、嫌な思いをしたりすることもあります。私達は「事が起こる前」に大人が経験を重ねてしまわずに、"事が起きたとき"に子ども達と一緒に考え合い、解決していくことを大切に考えたいと思います。



1歳の未就園児が保護者と一緒に参加する体験型プログラム「よちよちくらぶ」



「自由な時間とほったらかしの違い」など、保育者にとっては当たり前のことも、保護者の視点で丁寧にみ取り、Q & A形式で答えています。

ソコンで編集したもので、より具体的に保育をイメージしてもらうためにつけています。

保護者や地域住民と協同し「ともに育てる」保育文化を築く

未就園児の保護者に園の保育観を伝える機会のひとつとなっているのが、子育て支援として実施している未就園児向けプログラムの「よちよちくらぶ」(1歳児)、「たけのこランド」(2歳児)です。

「よちよちくらぶ」は、1期6回、親子と一緒に楽しむ参加型のプログラムです。「たけのこランド」は、1期10回、親子で参加したり、子どものみで実施したり、徐々に遊び

を広げていきます。どちらも、保護者同士が交流したり、安家先生をはじめとした保育者が育児の助言をしたりする時間を大切にしています。

「地域の子育て支援をしたいという気持ちから始めたプログラムです。参加者の中には、私たちの保育観や人間観に共感して入園してくださる方もいます」(安家先生)

特別な募集はしていませんが、クチコミにより、毎年応募者多数で抽選となっています。

「保護者は、『いいな』と思ったことは、必ず周囲に伝えてください。より多くの保護者や地域住民の共感を得て輪を広げていくことで、地域とともに子どもを育てる文化を築いていきたいと思っています」(安家先生)

あけぼの幼稚園
◎教育理念は「自由な人間になる」。そのために自由な時間や遊びにこだわった保育を実践する。2009年に認定こども園として認可され、あけぼのこ保育園を併設する。

園長 安家周一先生
所在地 大阪府豊中市南桜塚2-14-7
園児数 214人(3~5歳児)



事例2 データや事実を織り交ぜた説明で、漠然としがちな保育理念をイメージしやすくする

立花愛の園幼稚園 (兵庫県・私立認定こども園)

立花愛の園幼稚園は、「あと伸びする力」を育むことを目指しています。あとから育つ力の下地をつくるのがねらいのため、保護者にも長期的な見通しをもってもらう必要があります。入園説明会の様子から、保育の理念や実践を具体的にわかりやすく説明する工夫をご紹介します。

自分で人生を歩む力を子どもに育みたい

立花愛の園幼稚園の保育理念は、「あと伸びする力」を育むことです。園長の濱名浩先生はこのように説明します。

「いろいろなことが早くできるようになっても、すぐにしぼんでしまう力では意味がありません。ゆっくりとでもいいので、生きるための力を確かに育てることを目指しています。そのためには、大人がレールを敷くのではなく、子どもの心に火をつけて、つまずいても自分の力で歩んでいける力を育てたいと考えています。それが『あと伸びする力』です」

「あと伸びする力」を育む保育は、すぐに何かをできるようにすることを目標としていません。そのため、保護者にも長い目で見てもらい、丁寧な説明が求められ

ると言います。「『あと伸びする力』は、見えにくいものです。そのため、保護者に対して『こういう力がつきます』というわかりやすい説明はできません。子どもの発達段階を踏まえ、『この時期には何を大切にしているか』という保育の根本にあるねらいを理解してもらうことから始めています」(濱名先生)

データや事実を織り交ぜ子どもの育ちの現状を伝える

未就園児の保護者に保育理念や具体的な実践を伝える機会となっているのが、毎年9月に実施する入園説明会です。入園説明会では、濱名先生が作成した資料(約40ページ)を使って約40分間にわたって説明します。

「保育理念は、どうしても漠然とした内容になりがちです。しかし、それでは、専門知識がない保護者



は理解できません。そこで、視覚的に訴えかけるデータや説得力のある事実を提示するように心がけています」(濱名先生)

入園説明会の内容を具体的にみていきましょう。

冒頭で現代の子どもの問題意識を共有するために提示するのが、「小学4~6年生のなりた人間像(国際比較)」(図1)というデータです。このデータは、東京の小学生のなりた人間像の数値が、外国に比べ、著しく低いことを示しています。

「海外の子どもに比べ、日本の子どもの意欲や勉強に関する関心の低さを知り、大きなショックを受ける保護者が多いです。最初に問題意識

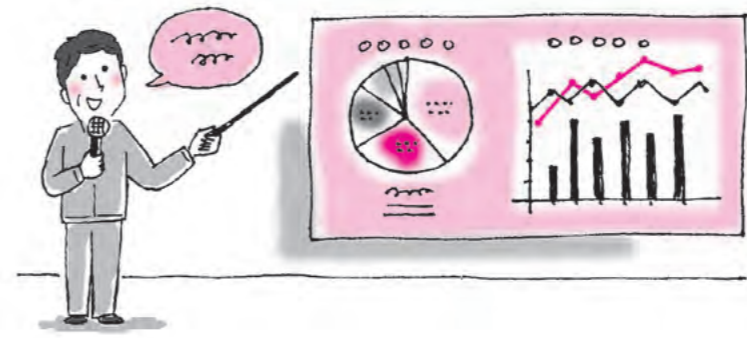
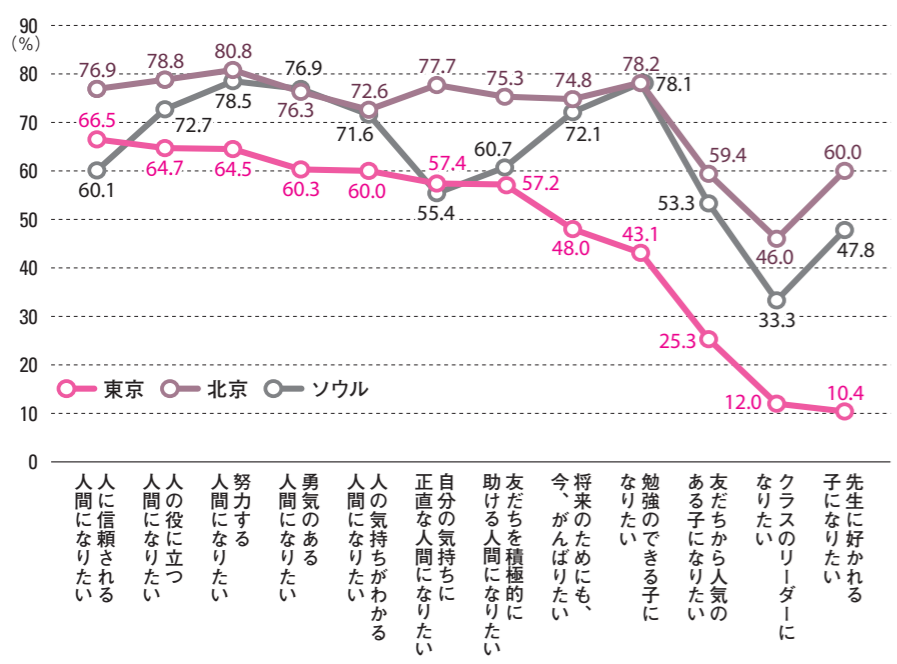




図1 小学4～6年生のなりたい人間像（国際比較）



注) 4段階の選択肢のうち、「そう思う」と答えた割合。
出典：財団法人日本青少年研究所「小学生の生活習慣に関する調査」(2007)

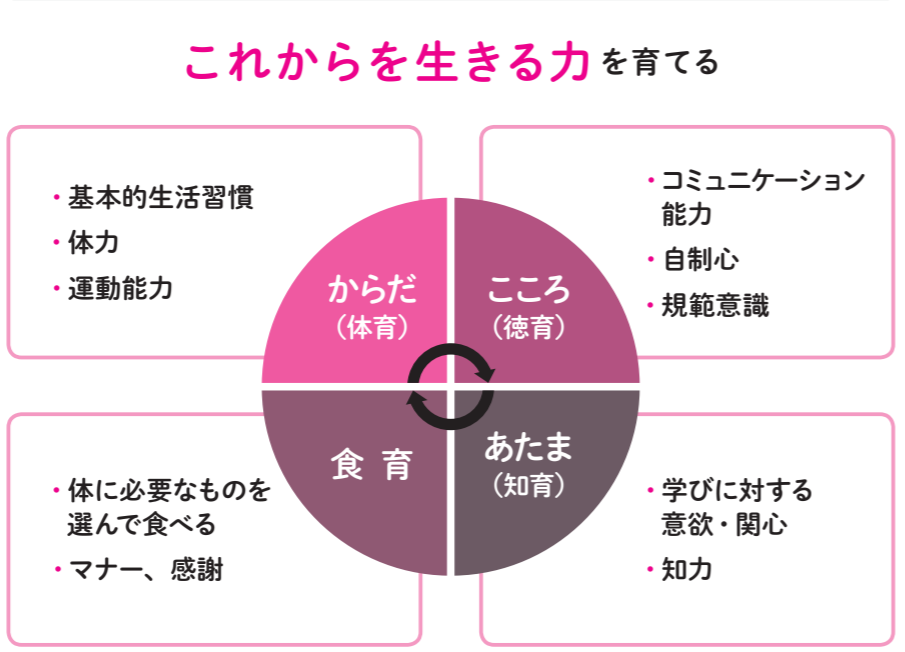
教育ではなく、自らの興味や関心に添い、友だちとともに、心と体に体験を刻み込んでいくことが『学び』であると考えています。私たちの保育を理解していただくため、この点については重点的に説明します」(濱名先生)

そうした方針のもと、「からだ(体育)」「こころ(徳育)」「食育」「あたま(知育)」の4つの領域を大切にしていることを、図を示して説明します(図2)。

保育の中で「学び」を促すために大切にしているのが「遊び」です。「遊び」という言葉もさまざまな意味をもち、保護者によって異なるイメージを抱くため、詳しく説明します。まず考えてもらうのが、ふだん、保護者が行う「公園での遊び」と「保育の中での遊び」の違いです。

「保護者が近所で遊ばせるなど、子ども任せの遊びでは、発達段階に見合った意味のある援助はなされ

図2 立花愛の園幼稚園が大切にしている4つの領域



を共有することで、『それでは、どのように育てればよいのか』というものを、一緒に考えてもらうのがねらいです」(濱名先生)

さらに、幼児教育について述べた文部科学省中央教育審議会答申の中で、子どもの育ちの変化として【基本的な生活習慣の欠如】【自制心や規範意識の不足】【コミュニケーション能力の不足】【小学校生活への不適応】【学びに対する意欲・関心の低下】が挙げられていることを説明します。ただし、ひとつずつ細かく解説すると専門的な内容になってしまうため、「こういう指摘がある」という程度の簡単な説明にとどめています。

「遊び」や「学び」は例を挙げて解説

続いて、保育を通した「学び」に

ず、その場限りの遊びになりがちです。これが『公園での遊び』です。園では、保育者が一人ひとりの子どもを理解して記録を作成し、必要な環境や経験を見通し計画を立てるなど、継続的な指導・援助が行われます。これが『保育の中での遊び』です。このように説明して『保育の中での遊び』とは『学び』に他ならないことを理解していただきます」さらに、「遊び」は、発達段階に応じて変化することも説明します(図3)。

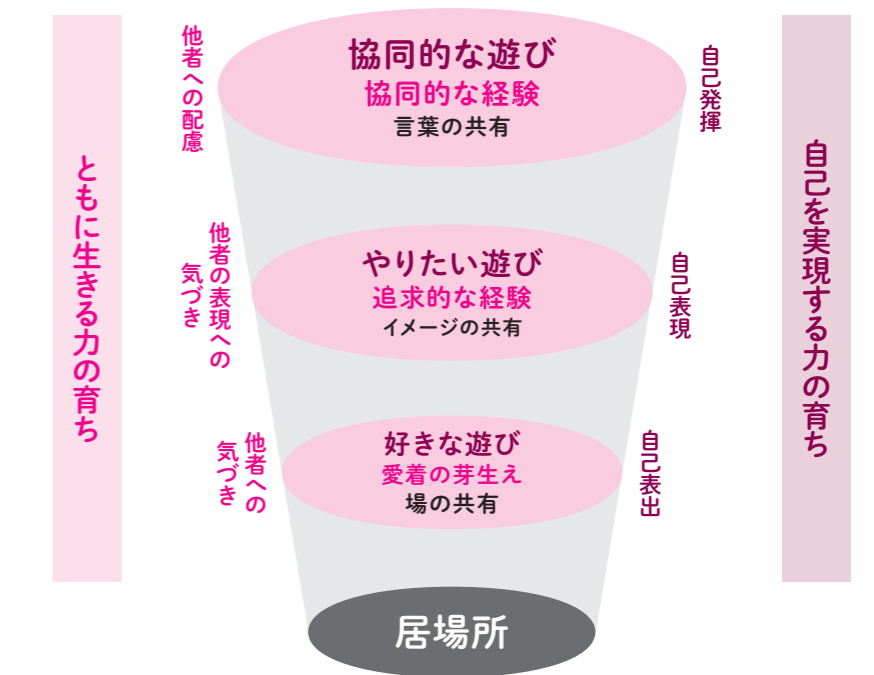
保護者が気になる文字、数は園ならではの獲得過程を提示

文字や数の習得も、保護者の大きな関心事です。そこで、遊びの中で、自然に文字や数を獲得していく姿を説明します。例えば、濱名先生は、このような実際にあった育ちを例示しています。

保育室にポストを置いたら、ある女の子が友だちに自分の描いた絵を渡そうとして入れました。受け取った子どもはどうしても返事を書きたくなり、家で保護者から文字を覚えてもらい、『〇〇ちゃんへ』と書いてポストに入れました。このような簡単な手紙のやりとりが、じわじわとクラスに広がっていきました。

こうした説明により、大人が文字や数を教えるのではなく、子どもが自然に興味をもって自ら獲得するように促す支援に徹するという園の方針を理解してもらいます。

図3 発達段階に応じて変化する遊び



出典：文部科学省 平成21年度幼児教育の改善・充実調査研究「協同して遊ぶことに関する指導の在り方」(全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会、兵庫県)

立花愛の園幼稚園

◎遊びを通した豊かな体験・生きた体験を重視した保育に取り組む。同市内で武庫愛の園幼稚園も運営。平成25年、「対話が育てるたくましく生きる力」をテーマにした保育実践で、第62回読売教育賞「幼児教育・保育部門」の優秀賞を受賞した。
園長 濱名 浩先生
所在地 兵庫県尼崎市立花町3-20-27
園児数 515人(3～5歳児)



写真を使って 保育を「もっと伝える」 ポイント

写真を使った保育の発信の際、伝える力を
グンと高めるためのちょっとしたポイントをご紹介します。



ねらいや見通しを明確にして 保育環境をつくることが 「撮りたい場面」を生み出す

保育の内容や子どもの育ちが伝わりやすい写真を撮るためには、
どのようなポイントを心がけるとよいのでしょうか。
ベネッセ教育総合研究所の磯部頼子顧問が解説します。

ベネッセ教育総合研究所顧問 **磯部頼子**



「撮る」「伝える」場面で 心がけておきたいこと

保育をより伝えられる写真を撮るためには、まず、保育者も子どもも心を弾ませているような「楽しい場面」に出合う必要があります。保育者が明確なねらいや見通しをもって環境を構成し、それを子どもが心を弾ませて取り入れたときに、「写真に残したい」と思えるよい場面が生まれやすいと思います。

写真で伝えるということは、「撮

る」ことと、「(掲示などで) 伝える」ことに分けられます。

まず、「撮る」ことで心がけたいのが、「かっこよく撮ろう」「かわいく撮ろう」などと思わず、自然な姿を撮影することです。よい表情は、笑顔だけではなく、驚きや不思議や感動など、さまざまな場面で見られます。「何をしているか」が伝わり、変化や経過が見えてくる写真は、保育のねらいや内容が伝わりやすいと思います。

「伝える」ことで工夫していただ

きたいのが、写真に添えるコメントです。単なる状況説明だけでなく、子どもや保育者の思いを表現するようにしましょう。全てにつける必要はありませんが、温かみを感じられるコメントを書くセンスをみがくといいですね。

記録にはビデオなどの方法もありますが、写真にはじっと見ることによって想像力が膨らみ、雰囲気豊かに伝わるなど、静止画ならではの良さがあります。ぜひ効果的な情報発信のツールのひとつにしてください。

事例 1

壁新聞形式の「ボード・フォリオ」で 子どもに寄り添う 保育の姿勢を伝える

和光保育園(千葉県・私立)

長年、保護者への保育の伝え方を工夫してきた和光保育園が、3年前に始めたのが、写真とコメントで構成される壁新聞のような形式の「ボード・フォリオ」です。日常の保育についてわかりやすく伝えることで、保護者が子どもの気持ちに寄り添い、響き合うきっかけにしてほしいと願っています。

ひと目でわかる写真で 出来事をその日のうちに伝える

和光保育園園長の鈴木真廣先生は、30年ほど前から、保護者への保育の伝え方を工夫し続けています。きっかけは、保護者が書く卒園文集の内容が行事の思い出ばかりで、日常の保育への理解が深まっていないと感じたことでした。

25年ほど前から各クラスで毎日続けているのが「連絡ボード」です。これはその日の出来事や子どもの姿をB4用紙1枚程度に手書きの文章で書いて掲示するというものです。

さらにデジカメやプリンターなどの機器がそろった3年前から、「ボード・フォリオ」(学びの物語ファイルを指す「ポート・フォリオ」という単語をヒントに命名)という単語をヒントに命名)という掲示物の制作を始めました。

ボード・フォリオは、写真とコメントを組み合わせた壁新聞のような形式です(写真1・2)。これを保護者の目に入りやすいクラスの入入口の掲示板に掲示します。



写真1
幼児クラスのボード・フォリオ。子どもたちの試行錯誤の様子や気持ちを代弁するコメントによって、保育がいっききと伝わります。

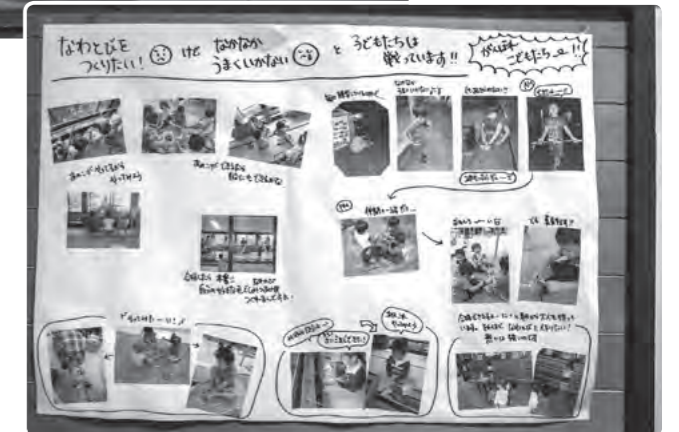


写真2

ボード・フォリオは、子どもの学びや成長、変化など、保護者に伝えたいことがあるときに不定期に制作します。クラスによって異なりますが、0~1歳児クラスは、月2~3回制作します。子どもの午睡中に作成し、写真の整理から完成まで、1時間半程度を要します。

ボード・フォリオのよさについて、鈴木先生は次のように話します。

「『少しでも早く伝えたい』というホットな情報や感動をその日のうちに伝えるのに適した方法です。文章や言葉ではうまく伝わらないことでも、写真を使えば、『百聞は一

見にしからず』ということがあります」

遊びの中での成長と 保育者の援助が明確に伝わる

ボード・フォリオを通し、具体的にはどのようなことを伝えているのでしょうか。

一例として、1歳の女の子の遊びの様子を取り上げたボード・フォリオを紹介しましょう（写真3）。

昼食前、手を洗いに行く時間に、その女の子はクラスにある椅子にぬいぐるみを座らせる遊びを始めました。一脚ずつ、ぬいぐるみを並べていく姿を見て、「おもしろい遊びを

始めたな」と思った担任の秋田美幸先生は、写真を撮りながら見守ることにしました。

「ほかの子どもが手を洗うために部屋から出たので、ひとりで遊びに集中するという状況が生まれました。それまであまり見られなかった『1対1対応』の表れに成長を感じました」

ぬいぐるみを並べ終えた頃を見計らい、秋田先生が「みんな座ったね」「手を洗ったお友だちが帰ってくるから、お引越しようか」と声をかけると、満足そうな表情で片付けをして手を洗いに行きました。

「その子は『イヤイヤ期』に入ったばかりということもあり、家庭では食事前に手を洗ってもらうのも苦労していたようでした。ボード・フォリオを見た母親は、満足するまで遊んだあとに率先して次の行動に移ることを知り、『家での声のかけ方を考え直してみたい』と話していました」（秋田先生）

この女の子の例のように、保育者が予期しないときに保護者に伝えた

い姿が表れることも多いため、デジカメは常に保育室に置かれています。また、紹介する子どもが偏らないように、満遍なく撮ることも心がけています。

コメントを工夫して 子どもの気持ちを代弁

ボード・フォリオでは、コメントもその場面の状況や雰囲気伝える大切な要素です。

「主に、子どもの気持ちを書くようにしています。特に乳児は言葉が出せないため、どのように感じているかを代弁するようにしています」（秋田先生）

コメントを通して発達過程について解説することもあります。例えば、積み木をする子どもの写真に、「慎重に崩れないように調整してのせるのは、すごいことなんですよ」とコメントを書き添え、遊びの意味を理解してもらえるようにしています。

ほかにボード・フォリオでは、その時期に教えている手遊び歌などを写真とともに伝え、子どもと保護者が一緒に遊べるようにしています（写真4）。

しかし、保育の合間を縫ってボード・フォリオや連絡ボードを作成するために要する時間や労力は小さくありません。そこで、少しでも保育者の負担を軽減するために、毎日やりとりしていた連絡帳を廃止し、代わりに保護者が主体となって子どもの様子を記録する「子育てノート」に切り替えました。子育てノートは、毎日提出してもらい、育児の記録を園に見せてもらうという位置づけで保育者がコメントを返すこともあり

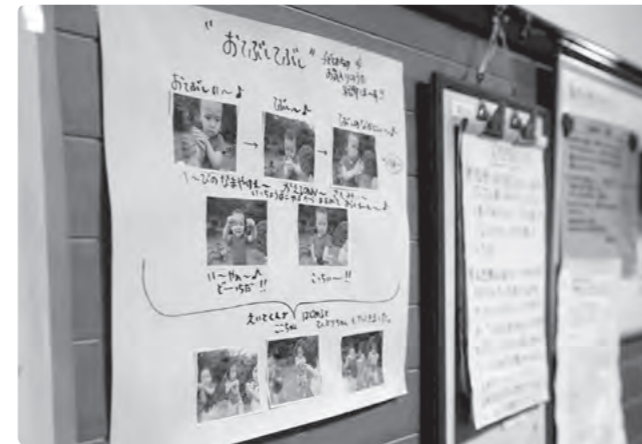


写真4
手遊び歌を紹介するボード・フォリオ。写真だと遊びをよりわかりやすく伝えられます。

ます。

また、ボード・フォリオは、遊びの展開を見通して伝える内容をあらかじめ想定しておく、レイアウトやコメント作成などに時間がかからず、労力が軽減されると言います。

写真をきっかけに 子ども自身が保護者に 遊びの様子を伝え始めた

ボード・フォリオは、保護者からどのように受け止められているのでしょうか。

「とても楽しみにしてくださる方が多いです。成長がわかりやすく伝わって、子どもの気持ちに寄り添い、響き合うきっかけになっているのではないかと思います」（鈴木先生）

子どもは連絡ボードの文字は読めませんが、写真はわかるため、ボード・フォリオのストーリーテラーとなって保護者に遊びの様子を必死に伝える姿が見られるようになりました。

「ボード・フォリオを説明する子どもから、『あのとき、こうすればよかった』といったつぶやきが聞かれるなど、子ども自身が遊びを振り

返る機会になっているのは、思いがけない効果です」（鈴木先生）

制作プロセスが 園内研修としても機能

ボード・フォリオの制作は、保育者が保育を振り返るきっかけにもなっています。写真を切り貼りしながら、「こんなことがあったよね」「保

護者にも伝えたいよね」などと振り返ったり共有したりすることで、園内研修のような効果があると言います。ボード・フォリオは、子どもの成長や保護者の理解に加え、保育の質の向上ももたらしています。

長年、情報発信の工夫を続けてきた鈴木先生に、保護者に保育を伝えるうえでのポイントをうかがいました。

「園だよりやクラスだよりなどは、『～します』『～しました』といった連絡や報告が多くなりがちだと思います。それを子どもの気持ちに寄り添い、子どもの姿や心の動きに保育者のまなざしを添えて語るようにしていくとよいのではないのでしょうか。その中で写真を上手に活用すると、より伝わりやすくなると思います」

写真撮影 ここがポイント！

- 撮影前** 遊びの展開を見通し、伝える内容を想定することで、効率よい制作につなげる
- 撮影中** おもしろいシーンや新たに見られた成長を中心に撮影。予期しない場面に備え、デジカメは常に準備
- 撮影後** コメントは、子どもの気持ちの代弁や、育ちの姿の解説を中心に書く

和光保育園

◎1957年開園。保育理念のベースは、倉橋惣三の「すべてに精神の発達に、『やってみること』『自分が失敗して試してみること』からできていく。陶芸用の窯「わこう窯」を園庭に設置するなどして子どもの体験活動を充実させている。

園長 鈴木眞廣先生
所在地 千葉県富津市小久保2209
園児数 104人(0～5歳児)



園長 鈴木眞廣先生

0・1歳担当
秋田美幸先生



写真3 ぬいぐるみを椅子に並べて遊ぶ園児。この写真が、保護者にとって子どもの育ちを理解し、家庭での声かけを見直すきっかけになりました。

事例 2

園だからこそ見せる姿を写真でとらえ 「個人アルバム」にまとめて 育ちを伝える

うた
鳩の森愛の詩保育園 (神奈川県・私立)

「日中の元気な姿を知ってほしい」という思いから、ひとり1冊の個人アルバムを毎月制作し、子どもの育ちを保護者に伝えている鳩の森愛の詩保育園。

写真を撮影してセレクトする過程は、保育を振り返る貴重な機会にもなっています。

各月の印象的な場面を アルバムに整理

桜や梅、ぶどう、びわなどの木々が植えられ、四季折々の表情を見せる鳩の森愛の詩保育園。自然豊かな環境でのびのびと育つ子どもの姿を保護者に伝えるために、開園した29年前から写真を有効活用しています。

写真で育ちを伝える取り組みは、園日より、連絡帳への貼付、お誕生日カード、壁面掲示などさまざまですが、なかでも特徴的なのが「個人アルバム」です。

個人アルバムはひとり1冊を用意し、1カ月につき10枚程度の写真を選んで見開き(左右2ページ)

に貼ります。写真は基本的にLサイズですが、各月の最も印象深い1枚は2Lサイズに引き伸ばします。保護者にこまめに子どもの成長を感じてもらえるように、1カ月単位で渡しています。現像代などにかかる費用は、保護者負担です(月600円程度)。

保育のねらいを確認し 撮りたい場面を絞る

個人アルバムは、どのような思いから生まれたのでしょうか。副園長の池田佳代子先生にお話をうかがいました。

「子どもは朝は眠く、泣いてしまったり、お迎え時は遊び疲れていることもあったりと、保護者が日中の元気な姿を見る機会には実はあまりありません。そこで、こんなによく遊び、食べ、成長しているということを伝えたいと考え、個人アルバムを制作しています」

子どもの育ちが表れた写真を撮影するために、先生がたはいくつかのポイントを共有しています。

まず、各月の保育のねらいをよく確認し、「保護者に伝えたい子ども



副園長 池田佳代子先生

おみや 近江屋希先生

の育ち」を明確にすることです。常に保育のねらいを意識することで、シャッターを押すタイミングがおのずと見えてきます。一方、保育者の予想を超えた姿が見られたときも、シャッターチャンスととらえています。

集団の中だからこそ見せる 喜怒哀楽を伝える

いきいきとした表情や雰囲気をとらえるために気をつけていることもあります。近江屋希先生はこのように話します

「子どもの目の高さで撮ると、自然な写真になります。また、かわいい表情の写真は、家庭で撮られてい



個人アルバムは成長記録として喜ばれています。

家庭では見せない育ちの姿を写真で伝えることで、園の活動や理念への理解も深めてもらえます。



ると思いますので、集団の中だからこそ見せる真剣な表情、ときには泣いている姿など、園での喜怒哀楽を伝えたいと考えています」

育ちを感じられる場面はいつ訪れるかわかりませんから、保育者は常にウエストポーチにデジカメを入れています。

撮影した写真はパソコンでセレクトし、週1回、現像します。こまめに現像すると、撮影した子どもに偏りがあることに気づいたり、保育の内容を具体的に振り返る機会になったりするよさがあります。

写真をアルバムに貼る際は、コメントはあえてつけません。

「子どもが写真について説明したり、写真から保護者自身が想像したりすることで、家族の会話が広がるきっかけになるからです。また作成にかかる保育者の負担も軽減できます」(近江屋先生)

写真の撮影・選別のプロセスが 保育の振り返りにつながる

保護者は、個人アルバムをどのよ

うに評価しているのでしょうか。

「アルバムをやめてデジタルデータをお渡しするという案が出たことがあります。『アルバムを続けてほしい』という声が多く寄せられました。『アルバムだからこそ祖父母

や家族も一緒に見られて会話が弾む』『子どもがよい表情で過ごしているのがわかって安心』『子どもの友だち関係もよくわかる』といった感想をいただいています」(池田先生)

特に新入園児の日中の様子がわかることで安心する保護者が多いと言います。

「子どもの育ちを見取って撮影したり、写真を選んだりする過程は、保育を見つめ直すきっかけとなり、保育者の成長をもたらしています。毎月、全員分のアルバムを作るには、相応の時間や労力がかかります。それでも、保護者の要望が大きいこと、そして保育の質の向上につながることから、これからも続けていく方針です」(池田先生)

写真撮影 ここがポイント!

撮影前 各月の保育のねらいを職員で確認・共有し、「伝えたい育ち」を明確にする

撮影中 集団だからこそ、園だからこそ見せる 喜怒哀楽を重点的に撮る

撮影後 週1回などこまめに現像することで、保育の振り返りの機会にもする

鳩の森愛の詩保育園

◎社会福祉法人はとの会が横浜市内に運営する4保育園のひとつ。子どもたちを真ん中に、保育者と保護者が手をつなぎ合い、成長し合うことを「共育で共育ち」と呼んで大切にしている。

園長 瀬沼静子先生
所在地 神奈川県横浜市泉区弥生台1丁目8番
園児数 定員100人(0~5歳児)



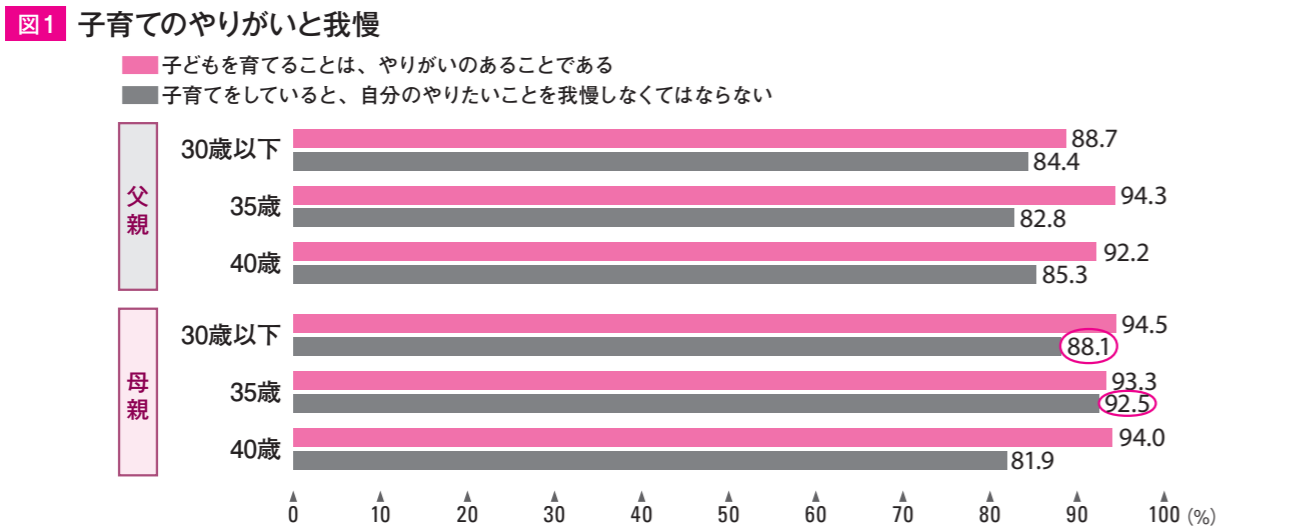
30歳以下・35歳・40歳保護者を比較 世代間の子育て意識の違い

ベネッセ教育総合研究所は、2013年3月に20～40歳の男女を対象に、生活技術の実態や将来の家庭像を明らかにすることを目的にアンケート調査を実施しました。この調査の中から、今回は、特に0～6歳の子どもをもつ保護者にしぼり、子育て意識の違いに関するデータをご紹介します。家庭への支援を考える材料のひとつとして、ぜひご活用ください。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ教育総合研究所「ライフスタイルに関する調査（2013）」）。

35歳以下の母親は「子育て中はやりたいことを我慢しなくてはならない」と答える割合が高い

Q あなたは次のようなことについて、どのように思いますか。それぞれ最もあてはまるものをお選びください。



注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の% 注2) 0～6歳の子どもをもつ保護者を対象とした。

研究員解説

子育てについての考えを聞いたものが図1です。「子どもを育てることは、やりがいのあることである」では、父親・母親ともにどの年齢でも「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した人が9割前後であり、総じて高い数値になっています。また「子育てをしていると、自分のやりたいことを我慢しなくてはならない」でも、8～9割が「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答しています。多くの父親・母親が、子育てにやりがいを見いだしている一方で、我慢をしいられるものでもと感じてい

るのです。一見矛盾するようですが、子育てはやりがいも我慢も両方の側面をもっているものであることを示した結果と言えると思います。30歳以下と35歳の母親では「子育てをしていると、自分のやりたいことを我慢しなくてはならない」が40歳の母親に比べて高くなっています。2、3歳児が多くを占めている世代で（図表略）、手のかかる時期であることも影響していると思われます。

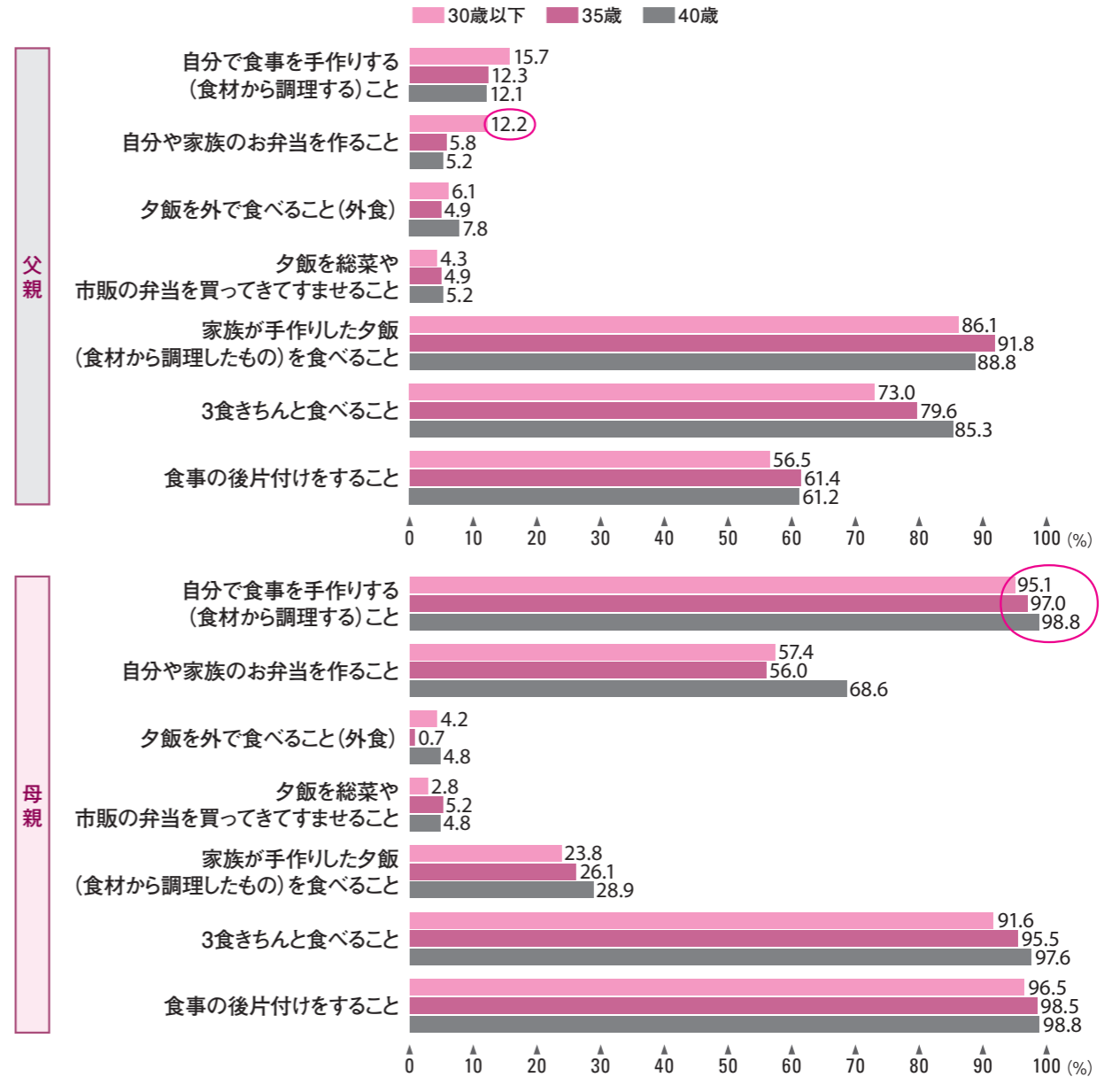


高岡純子研究員◎ベネッセ教育総合研究所主任研究員。妊娠・出産や子育てなど就学前の家庭を対象とする調査研究に携わる。

世代に関わらず、9割以上の母親が自分で食事を手作りしている

Q あなたご自身は、ふだんの生活の中で次のことをどれくらいしていますか。それぞれについて頻度をお答えください。

図2 ふだんの生活の様子（食事編）



注1) 「ほぼ毎日」+「週に数回」の%

研究員解説

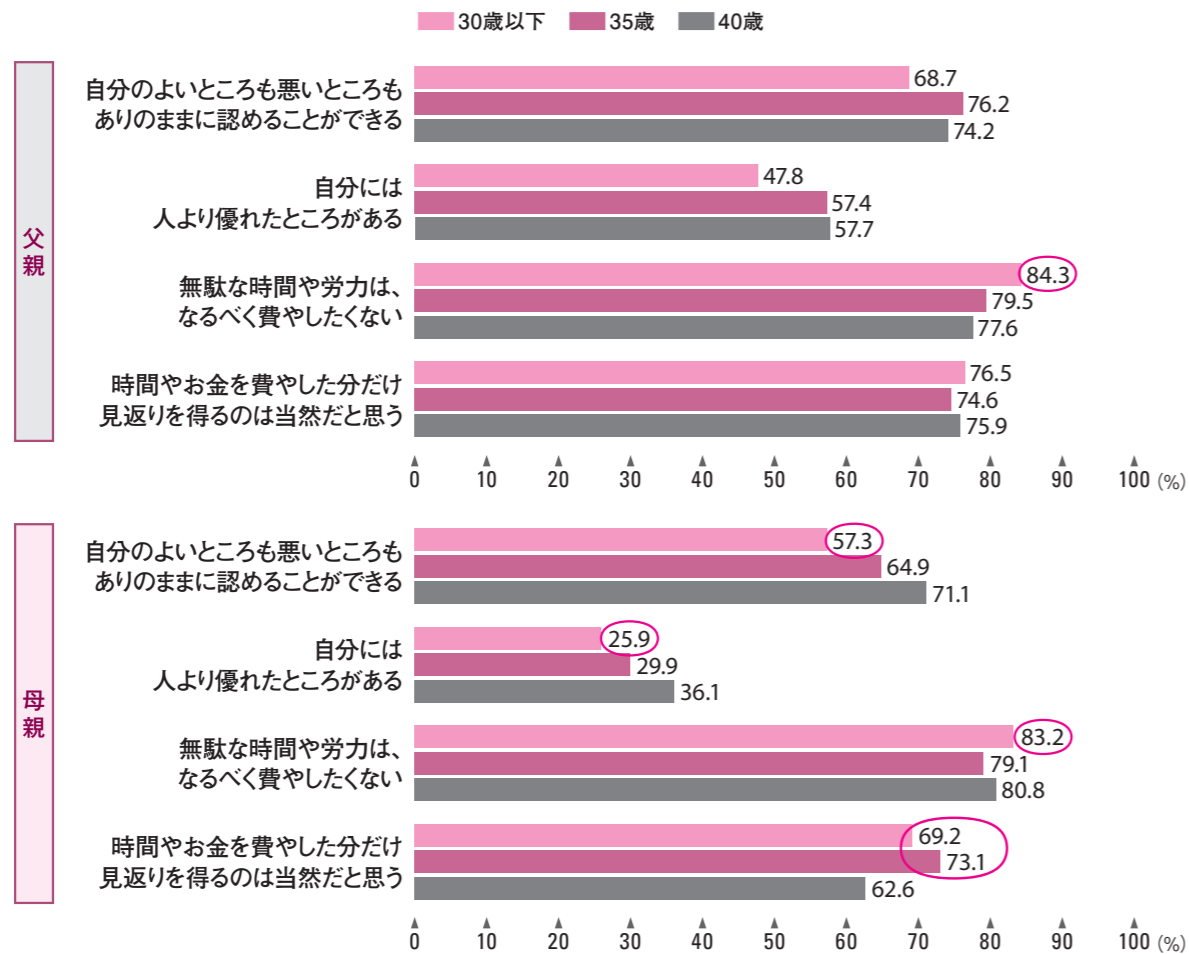
ふだんの食事の様子を聞いたものが図2です。父親・母親ともに「3食きちんと食べること」「食事の後片付けをすること」は半数～9割以上の人が「ほぼ毎日」「週に数回」と回答しています。母親では「自分で食事を手作りする（食材から調理すること）」ではどの年代でも95%を超えています。夕飯を外で食べる、また夕飯を総菜や市販の弁当ですませることはともに1割以下となっており、さまざまな食品がそ

ろ多様化する中でも、食材から調理をしている母親が多い様子が見えます。父親で最も多いのは「家族が手作りの夕飯を食べること」（どの年代でも9割前後）で、自宅で夕飯をとる父親が多い様子が見えます。自分や家族のお弁当作りは、母親では5～6割が行っています。父親では、30歳以下が最も多く、約10人にひとりがほぼ毎日または週に数回の頻度で弁当を作っている様子が見えます。

若い年代ほど、かけた時間やお金に見合う結果をより求める傾向がある

Q あなたには、次のことがどれくらいあてはまりますか。それぞれ最もあてはまるものをお選びください。

図3 価値観



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%

研究員解説

さまざまな価値観について聞いたものが図3です。自身のとらえ方については、「自分のよいところ悪いところありのままに認めることができる」では、父親では7割前後が「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答していますが、母親では30歳以下で57.3%と最も低い数値となりました。「自分には人より優れたところがある」では、母親で4割以下であり、特に30歳以下では25.9%と最も低くなっています。またお金や時間に関する考え方を聞いたところ、「無駄な時間や

労力は、なるべく費やしたくない」では父親の30歳以下では84.3%、母親の30歳以下では83.2%と高い数値となりました（「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計）。また「時間やお金を費やした分だけ見返りを得るのは当然だと思う」では、父親では総じて7割、母親では30歳以下と35歳で7割前後となっています。若い年代ほど、かけた時間や労力に見合ったものを求めるという傾向が見られる結果となりました。

出典：『ライフスタイルに関する調査』（2013年）
調査対象：20歳、25歳、30歳、35歳、40歳の男女
有効回答数：4,131名
調査時期：2013年3月下旬
調査地域：全国

調査方法：インターネット調査
調査項目：生活技術の実態、将来の家庭像
今回ご紹介したデータのサンプル数：父親／30歳以下115名、35歳122名、40歳116名 母親／30歳以下143名、35歳134名、40歳83名

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご利用ください。▶ <http://berd.benesse.jp/>

調査データを踏まえ、園ができる支援について考える

保護者の課題、ニーズを拾い上げて 保護者に「親としての自信」を与える



今回の調査は、食生活や価値観など、子育てに関する意識を広く聞きました。この結果から、園ができる子育て支援はどのようなものが考えられるのでしょうか。目白大学人間学部子ども学科の荒牧美佐子先生にうかがいました。

目白大学 人間学部 子ども学科専任講師

荒牧美佐子

あらまき・みさこ

専門分野は発達心理学。乳幼児をもつ母親の育児感情、園における子育て支援の効果検証、幼児期の家庭教育が子どもの発達に与える影響などについて研究を行う。

食に対する保護者の関心が高まっている

今回の調査で最も目を引いたのは、母親の食に対する意識です。「自分で食事を手作りする（食材から調理すること）」をふだんから行う母親はどの世代でも95%を超え、「3食きちんと食べること」もほとんどの母親が実践しているという結果が見られました（図1）。

最近、家庭における子どもたちの食生活に関心をもっていらっしゃる園の先生は少なくないと感じていました。確かに、子どもの食事の仕方や好き嫌いなど、食に関する行動から家庭生活の改善点が垣間見えることはよくあることです。

しかし、今回の調査からは、食に対して高い意識をもつ母親像が見えてきました。ここで紹介されているデータ以外でも、30歳以下の世代では「上手になりたいもの」として料理を挙げるなど、食への関心が高まっている傾向が見て取れます。保護者の高い自己評価や関心と、園の先生がとらえられている現状とのギャップについて、園内で話し合ってみていただきたいと思いました。

先生がたには、好き嫌いの克服や栄養面に配慮したメニューの紹介など、食生活をよりよくするためのアドバイスに加えて、子どもが「食べることって楽しい！」と思えるような食事の雰囲気づくりの大切さも保護者に伝えてほしいと思います。このように、今回の調査結果は、今の保護者の状況に合った子育て支援を考えるひとつのヒントになるのではないのでしょうか。

保護者の自尊感情の低さが園への期待を大きくしている

もうひとつ気になったのは、「自分には人より優れたところがある」と考えている母親が、特に若い世代は

ど少ないことです（図3）。最近、若い保護者の中には園に対して保育をサービスととらえるケースがあるとされています。確かに今回の調査でも、費やした時間やお金に見合った見返りを求める傾向は見て取れます。しかしもしかすると、園に対するそうした思いの背景には「サービスを受けたい」という気持ちからだけでなく、自分に対する自信のなさ、子育てに対する不安もあるのではないかと感じました。

近年、地域との関わりが少なくなり、子育てについて相談できる人が園の先生しかいないという保護者も珍しくありません。不安を抱える保護者がこれまで以上に、園のサポートを期待することは想像できますし、園が「一緒に子どもを育てましょう」という姿勢を伝えていくことは、ますます重要だと思います。

保護者と語り合う中でそれぞれのニーズを拾い上げ、少しずつ「親」として自信をもてるような働きかけを行っていただきたいと思います。



2012年に当研究所が実施した「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」(*)では、人の話を最後まで聞く、相手の意見を聞く、物事に挑戦する、自分の気持ちを調整するなどの力がその後の「学びに向かう力」の土台になることが明らかになりました。「学びに向かう力」を、幼児期にどう育むかを考えます。

*調査結果はHPをご覧ください。▶▶▶ <http://berd.benesse.jp/>

第2回 「あきらめずに挑戦する力」を育む

イラストで見ると「あきらめずに挑戦する力」が育まれた状態とは？

Aちゃん
5歳・冬～春

Aちゃんのクラスは、みんな投げこまに夢中です。クラスのほとんどの子はこまを回せるようになりましたが、Aちゃんはやっとひもを巻き付けられるようになったところで、まだうまく回せません。そんなある日、クラスの担任が「1週間後にこま回し大会をしよう!」と提案。みんなは大喜びで、大会に向けてさらに練習を始めました。Aちゃんは「大会の日までに、どうしてもうまく回せるようになりたい」と強く思い、こまをよく回せるBちゃんに「どうすれば回せるの?」と尋ねました。BちゃんはAちゃんに一生懸命教え始めました。

担任の言葉にそれぞれやる気を高めたふたりは、さらに練習を続けました。すると、降園間際にAちゃんのこまは少し回ったのです。

練習するふたりを見た担任は「Aちゃんは回せるようになりたい気持ちで自分からBちゃんに聞いたんだね。そうやって人に聞くことは大事なことだね」「Bちゃんもわかりやすく教えているね」と声をかけました。

担任の言葉にそれぞれやる気を高めたふたりは、さらに練習を続けました。すると、降園間際にAちゃんのこまは少し回ったのです。



1 2
3 4



ふたりは喜び合って担任に報告に行きました。担任は「ふたりの力が合わさって成功したんだね。Aちゃん、こま回し大会が楽しみになってきたね」とふたりの努力を認め、Bちゃんは「また明日も練習しよう」とAちゃんを励まします。

翌日もふたりは練習を続けました。Aちゃんのこまが回る度に、Bちゃんは自分のことのように大喜び。Aちゃんもうれしそうに、さらに練習を続けました。



先生とBちゃんが励ましてくれたから、あきらめないでがんばれたよ!



めあての強さと周囲の支えの中で育つ力

あきらめずに挑戦する力をもつことで、自分がめあてに向かって取り組んだことを実現し、大きな達成感を得ることができます。この達成感は次の挑戦、そしてその後の育ちにつながる重要なものです。

あきらめずに挑戦する力の育成には、自分自身のやりたい気持ちやめあての強さが大切です。めあてが強ければ、試行錯誤しながらも、目標に向かって集中して取り組めるからです。しかしそれだけではなく、周囲の励まし、支えが欠かせません。こま回

しに挑戦するAちゃんにとって、担任とBちゃんふたりの励ましが大きな支えになっています。特に5歳頃になると、保育者からの声かけ以上に子ども同士の励ましが重要になります。

「あきらめない」という、我慢する精神力のよりに思えますが、それだけではありません。子どもの中の「やりたい!」という明確なめあて、そしてまわりの人の励ましや支えの中で、やり遂げた結果として育まれる力なのです。

●「あきらめずに挑戦する力」が育つために必要な経験

- 0～2歳：同じ動作を繰り返すような遊びに夢中になりながら、自分が好きなことを好きなだけやっていいという安心感を体験する。
- 3歳：自分の行動に固有の意味づけをしてもらい、していることがおもしろいと実感する。砂場で団子を作っているときに「そのお団子は、Cちゃんが好きなきなこのお団子だね」などと声をかけ、行動を意味づける。それが「自分はこうしたい」というめあてをもつことにつながる。

- 4歳：「こういう遊びをしたい」という自分なりのめあてが明らかになる。誰かがいると楽しい、自分が受け入れられていることが実感できる体験をし、一緒に関わっていく楽しさを味わう。
- 5歳：自分のめあてをもって、周囲の励ましで挑戦し、達成感を味わうとともに、友だちと喜びを共有する体験をする。



適正なめあてと温かな人間関係、保育者のスキル面でのサポートも重要

3～4歳の頃は、簡単なめあてから得られた小さな満足感の積み重ねが大切です。しかし、年長になれば、ときには「あなたたちならもっとすごいことができるはず」と、育ちに応じて高い目標を子どもへの信頼感とともに提示することも必要です。そうして「やりたい!」という目標が見つければ、「今は大変だけど、がんばろう」と自覚的に行動するようになります。もちろん、高い目標であれば、すぐに達成できるとは限りませんから、保育者が「ここまではできたね」とそれまでの努力と成果を認め、次の方向や方法を示すことも大切です。また、喜び

を共有できる温かな雰囲気やクラスの中に培っておくことも、この力の育成には欠かせないと言えます。そして同時に、こま回しのような技能が求められる遊びでは、回すための原理を保育者が十分に理解し、コツをわかりやすく説明することもときには必要です。大人であっても、いくらがんばってもうまくいかない事柄に挑戦し続けることはできません。その子がどうすればうまくいくか、その要因を保育者が一人ひとりに応じて先に見通しておくことも大切でしょう。

